

郷土

第 4 号

平成 6 年 3 月 20 日

編集・発行 / 宮本常一記念事業策定審議会
東 和 町 役 場



「シーボルト上陸」の 記念碑設置

この度、沖家室を望む対岸の「牛ヶ首」に、「シーボルト上陸の記念碑」を設置しました。これは、宮本常一記念事業策定審議会が、町内の貴重な史跡を明確な形にして、後世につなげようというもので、次の碑文を刻んでいます。

碑 文

フィリップフォンシーボルト（一七九六—一八六六）は、ドイツの医学者及び博物学者であったが、文政六年（一八二三年）オランダ商館の医官として来日。文政七年長崎市外に蘭学塾兼診療所としての鳴滝塾を設立して日本人に西洋医学や自然科学の教授に当たり、伊東玄朴、高橋長英、岡研介、二宮啓作らを育てた。

シーボルトの牛ヶ首上陸については、「シーボルト江戸参府紀行」（駿南社刊）によると、「文政九年（一八二六年）三月三日、上関と室津との間の海峡を通過して午後十時牛ヶ首沖に碇を下ろし、翌三月四日にはこの牛ヶ首に上陸、動・植物の観察や対岸の沖家室島、平郡島、水無瀬島をスケッチして同日の午後出帆、東島と怒和島との間を東北東の針路をとって御手洗（広島県竹原市の南南西約十八、大崎下島）に向かう」とある。

古来よりこの地は、交通の要衝であり、この沖を幾多の人、文物が往来した。シーボルト上陸は、その一つの証左である。

人生を語る

ふるさとづくり 講演会

君原健二先生の紹介

君原健二先生は、昭和十六年三月二十日、福岡県のお生まれで五十三歳、現在は宗像市に在住され、九州女子短期大学教授、文部省特別功労指導委員として後任のご指導にご尽力されています。

昭和三十四年に戸畑中央高校を卒業して新日本製鉄にご入社、高校時代インターハイに出場した経験と更なる努力によって昭和三十七年第十六回朝日マラソンでデビュー。当時の日本記録を破る二時間十八分一秒八のタイムで堂々の三位を獲得しました。

以来、昭和三十九年の東京五輪マラソン八位、メキシコ二位、ミュンヘン五位入賞を成し遂げたほか、宮本常一記念事業では、去る三月一日、マラソン界の第一人者でメキシコ五輪で銀メダル獲得した君原健二先生をお招きして、「ふるさとづくり講演会」を開催しました。

会報「郷土」では、その講演内容を要約して皆さんにお伝えします。

劣等感の脱却

少年時代の私は得意なスポーツが無くその劣等感から脱却しよ

か、ボストンマラソンやアジア大会など十三回の優勝経験を持ち、過去四十五回出場したすべてのマラソンで棄権は一度も無いという日本マラソン界の第一人者です。

首をかしげて走る独特のフォームで一時代を築き上げた君原健二先生は、今から二十六年前の昭和四十三年十月のメキシコオリンピックでは高所と炎熱を克服し、国民の熱い期待に応えてエチオピアのマモについて銀メダルを獲得しました。四年後のミュンヘンオリンピックでも、日本のエース宇佐美選手の付き添い役として三十一歳の高齢にも拘らず出場。「無理に無理を重ねて、ポロポロに擦り切れた三十一歳の老体では、と

う、人より劣っている恥ずかしい心を克服しよう」と努力したつもりでした。今考えてみるとそれが私の努力する推進力になったのではないかと思えます。

私が陸上競技を始めたのは中学生の時で、陸上クラブからの勧誘がきっかけでした。私は本当は、走ることは好きではなかったけれど、気が小さかったのでその勧誘を断ることが出来なかったからな

ても世界の強豪には太刀打ちできない」との評価を一蹴して見事五位入賞を果たし、マラソン関係者はもとよりマスコミや国民すべてを驚かす快挙を成し遂げ、人はそれを「気力」とも「根性」とも呼びました。

『自分はなぜ走るのだろうか、なぜこんなに苦しい思いをしてまで走らねばならないのだろうか』

そんな自問を繰り返しながら、練習や試合で、生死ギリギリまで自らを追い込みながら、その苦しさを乗り越えてきた壮絶な生き方とマラソン人生。そんなマラソン人生からつかんだ勇気と知恵・教訓の数々は、私たちに感動的で貴重な指針を与えてくれています。

の人生でたいへん貴重な経験をすることが出来たのでした。

私の経験から、「人生は楽しいは、決して良い結果は得られない」ということが判りました。私にとって走ることは、人生の体験学習のような気がします。

根性と実力

マラソン競技は、人と競り合い戦っているように見えますが、実はそうではなく、他のランナーの

メキシコ五輪 マラソン銀メダル

君原先生

ことは気にせず自分のことしか考えてはいけな思いました。実際に自分をゴールに導くのは自分の足しか無いのです。一般社会でもそのようなことはよくあるのではないのかと思います。

根性、根性といわれますが、私は根性だけではどうにもならないことを思い知らされました。まず、その前に自分自身の実力をつけておかなければどうにも成らない場合もあるのです。その実力は、毎日毎日の鍛錬と努力なしでは決し

て得られないのです。

目標を持つ

私は、入社して先輩の一流選手と練習しながら「いつかは、あの先輩に追いつこう」、「いつかは一流選手になってやろう」と私なりに頑張りました。そして、毎日練習するうち一つの考えを持ちました。「一度に一流選手にはなれないけれど、一つの小さな目標を設定して達成するために努力する。



自分のマラソン人生で得た「頑張ることの苦しさ
と尊さそして喜び」について熱弁する君原先生。

そして、努力したことは必ず報われる、成果が目に見えなくても間接的に報われるのだ」と自分に言い聞かせました。一つの目標を達成するとまた一つ上の目標を設定する。そう考えてみることで走ることが楽しく思えるようになっていきました。

人の力や努力は、薄い一枚の紙切れのように微々たるものですが、何枚も重なると厚みを増してくるものです。

個性と工夫

「人は環境によって育つ」といいます。色々な性格の人が色々な環境の下で育つのです。人を育てるには、個性を生かすことが大切ではないでしょうか。

たとえば、アバレンボーやオテンバな人は活発な面を、おとなしい人は素直な面を生かすことが考えられるのです。

私は、人は我慢できる動物だともいいます。そこで、ほんの少しだけの我慢と工夫をすることによって、違った展開や成果が生まれる場合があります。ほんの少し、これが大切なのではないでしょうか。

夢とロマン

最後に、今の私には一つの目標があります。それは、第七十回大会で優勝した私にとって記念すべきボストンマラソンが第百回を迎えるので、その大会に出場することです。

皆さんにお願いがあります。それは、どんなことでもいいですから一つの目標を持って欲しいということです。そうすることによって、「夢やロマン」が生まれ人生に張りができるのではないのでしょうか。

長州大工の 美技を探訪

明治の豪邸

服部屋敷を移築

平成四年度に始まった西方の服部屋敷の移築再建工事が完成しました。

服部屋敷は、今から百十数年前の明治十八年に新築されたもので、その当時活躍していた長州大工の特殊で優れた技術を駆使し、しかも優良な材質を利用して建造されたものです。

この工事の総事業費は、建物部分に一億六千万円、庭部分に六百万円、調査・研究費に一千五百万円の約一億八千万円です。

会報「郷土」では、この貴重な技術や材質また建造に尽力した長州大工などについて探訪し、移築事業の意義と今後の利用計画などについて紹介してみたいと思います。

服部家の紹介

服部家は西方本郷の林家の分家



移築する前の西方の服部屋敷。巧な技と良い材質で建築しているためか、百数十年経過したにもかかわらず、しっかりとしていました。



◀ 実際に使われていた基礎の石材をそのまま移築・復元しました。



完成まじかの服部屋敷。重厚で木目細やかな造りの中にも優雅さが感じられます。

で、幕末のころ萩の士族の株を買って服部の姓を名乗り、農業のほかにも、酒屋、網元、廻漕業など手広く生業を行っていたとされています。

この屋敷が建築された明治十八年には、服部家の生業基盤も磐石で、名主、神宮寺永代総代、西方村村長職も兼ねるなど、島末の人々の中核となって活躍していました。従ってこの屋敷の造りは当家の人々が暮らすためのほかに、一般の人々の来訪をも考慮した屋敷構えになっています。

服部屋敷の特徴と 移築復原の意義

現在の東和町の町並みは明治年間のころから急速に建設が進み、現在のような民家群の体型が造られました。その原型となるのがこ



▶嘉永、大工などの文字が書き込まれた木材。建築にたずさわった人の熱意が伺えます。

の服部屋敷で、外観はそれまでの草葺き屋根と違った瓦葺き、塗家造りの主屋・土蔵・長屋をもつ重厚な屋敷構えで、西方では初めての瓦葺き、塗家造りの家として重要な意味を持っています。

瓦葺き、塗家造り民家と草葺き民家の大きな違いは、外観はもちろんのこと耐火性に優れていることと、草葺き屋根の五倍ほどの重量があることです。そして、瓦葺きの工法を考えれば、杣(そま)・きこり)・木挽(こびき)製材)・大工・左官・瓦職などの分業が多く、棟梁の指揮能力はそれ以前より大きくなりました。

元来、長州大工は東和町を拠点としており、瓦葺きになれた堂・宮大工でもある長州大工は、各職人を指揮してこうした民家を建設するのは手なれていました。この服部屋敷はその代表作の一つでもあります。そして、その建物の随所にみられる技術的な特徴を明らかにすることも目的の一つです。

移築復原の方針

長州大工は東和町出身者が多く、四国で盛んに活躍した。そのことを記した石塔が高知にありました。長州大工の特徴を色濃く残す服部屋敷は、長州大工の技術的

特徴を再学習できる屋敷構えを持っています。しかも、昭和三十六年ごろから空家となつて、民具もそのままの状態で見られたままで、古い時代の暮らしの雰囲気が色濃く残されています。

そのため、移築の復元は次の二点を方針の柱として進められました。

一点として、復元は明治十八年当時とし、建築物だけではなく、門・塀・井戸・石垣・樹木などを出来る限りそのままの屋敷構えにするという点と、民具は保管・修理し、移築復元された建物へ戻して再活用できる方法をと、修理不能な民具資料や服部家からの借用品は収蔵庫に保管するという点です。

活用の計画

活用の計画としては、まず第一に移築の作業段階において、長州大工の伝統的工法を学習・伝承する場とし、調査や復元設計は民家の構造、左官技術、木取りや材料の加工、瓦の特徴などの造形力も含め、その工法の特徴を明らかにすることを目的としています。第二には長州大工の工法を再興するため、東和町内の技術者を中心に歴史的遺産を再学習しようという

意欲のある人を指名して調査時点から参加・協力をお願いし、これ以降も伝承が可能ないように町自体が在来工法再興の事業を興して、この貴重な伝統的技術の継承が可能な体制を構築することです。このために、この工事に関わっている人達は、積極的にこの工法を調査・研究しながら建設を進めていきます。

第三には、代表的で重厚な造りの服部屋敷を町の一つのシンボリック的存在として位置づけ、「町の迎賓館」として、また、町民が憩える場としても利用可能な体制にする予定です。

服部屋敷の規模と造り

この服部屋敷の規模は、次の八項目のとおりです。

敷地面積は、四百〇五百坪程度です。

主な建物としては、主屋・広い長屋・蔵そのほかに小さな風呂場がありました。

庭はそれぞれ四つの門に対応して、外庭と内庭、主屋西側の庭、坪庭とに別れています。

主屋は、平入の木造二階建てで、四方下屋造りとなつていま

す。長屋は、梁間九間、桁行十三間に新座敷、下男部屋、ウマヤ木小屋、味噌部屋などを使い分けています。

流し場は、主屋と長屋が棟続きで直行しているところで、下男部屋前の土間部分がそれぞれです。

蔵は、平入で、梁間一間強、桁行六間の大きさで、戸前は梁間一間強・桁行六間、約六坪の下屋があり、足踏精米の臼と杵が置かれています。下屋の地下のイモグラは存在したかどうか未確認です。

風呂場は、現在倒壊していましたが、六尺×九尺の風呂場棟があったようです。

間取りの特徴

間取りの特徴としては、町内の



複雑な造りをみせる建物。

ほかの間取りに見られる本百姓型四間六（よまろく）とよばれる間取りで、つまりは六畳間が田の字に組まれている型の応用型です。

また、四間六に式台、三畳間、勝手、土間が続く、この部分が上屋となっております。

上屋の東側の下屋には内縁と濡場、西側は廊下となっております。

南側の下屋は、東に客用の風呂場と便所、西に家人用便所が突出し、間の下屋には仏間と個室（化粧部屋？）が並んでいます。

架構（梁「家のハリ」）

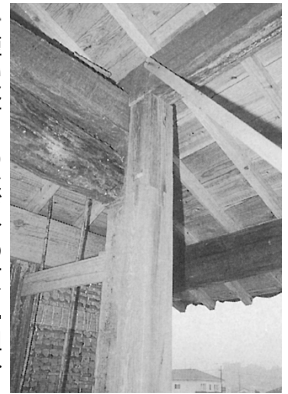
一見複雑に見える架構工法は、いくつかの特長をもって家を広く上品に仕上げています。服部屋敷の場合、主屋では上のまわり四方に下屋を設けています。（上屋＝



一本の柱に無数の木材が絡み合いしかも強固に複雑極まりない見事なまでの長州大工の技と努力の賜物です。

建物の中核をなす構造部分で、これがないれば建物が建ってられない部分のことをいいます。ここでは二階の桁廻りの内側を示しています。また、下屋「上屋」の周辺に張り出し追加した部分のことで

▶短い木材をつなぎ合わせて骨組みを仕上げていきます。

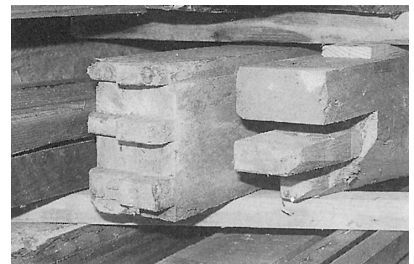


す。

服部屋敷が複雑に見えるのは、各々の間取りを見ただけでは構造上の上屋・下屋の区別がつきにくい点があるからです。

例えば、床の間付六畳間は上屋の内側にありますが、内縁は下屋であり濡れ縁も下屋です。式台の間は外側より三尺入ったところまでが下屋で、その内側は上屋となります。

また、上屋北妻面には通し柱がなく、上屋の重荷を一階の天井の梁が受けて下屋に分散する構造になっています。これは、いかに土間を広く取るかと屋根の形を美しく見せるかの工夫の賜物です。こ



電動工具が無かった頃、長州大工の優れた技の一つです。

のような架構（梁）技術は高度な墨出し技術と正確な加工技術により成せる技で、比較的短い材料を幾重にも組み合わせることで解決している点は、長州大工固有の技術と思われる。

組合せの構造

組合せの構造を具体的にみると、この工法は梁を縦に積み合わせていく和小屋組と、梁が屋根面に添って斜めに立上り、棟で合掌を組む登り木（梁）を交互に用いる組合せの工法です。

和小屋組は、建物長手方向の両端及び一間半～二間半おきに配し、水平の梁で建物の開きを止め屋根を支える。間仕切りと重なる部分では土壁付きになっています。

樹種材種（構造材）

梁、桁、差鴨居などは主に赤松が用いられているが、柱には数種類の木が見られています。大黒柱は檜、俵戸柵周辺はツガ、座敷廻りは杉（桧を含む）、水廻りにはクリも使われています。床柱はタガヤサンです。

これらの材の産地及び手入れ経路は定かではないが、地元もしくは自山の材木では賄いきれず、九州から持ち込まれた木材も多いということですが。

床下の大引、根太、旧主屋の柱転用材が見られます。弁柄塗りに成っているものが多く、古い民家には中古材が多様されていますが、服部屋敷では床下意外に見当りません。建設当時からかなりの財力があり、大半を新材で賄っています。

以上、出来る限り判り易く説明したつもりですが、建築の専門用語がたくさんあり理解するのが中々困難かもしれません。とにかく複雑で繊細なこの工事にたずさわった関係者の探求心と忍耐とそして情熱に感心させられました。オープン後は、まず足をお運びいただきご見学していただきたいと思ひます。

宮本常一記念事業の あらまし



1月28日、総合センターで開催された推進部
会で挨拶する西木町長

宮本常一記念事業は、東和町長
崎出身の著名な民俗学者、故宮本
常一先生の崇高な理念を継承し、
東和町の発展と町民の幸せを願っ
て行うことを目的に、昭和六十一年
から始まりました。

宮本常一先生は、日本を代表す
る民俗学者で全国の離島や農村・
漁村をくまなく踏査され、その調
査・研究をもとに日本の離島や過
疎地域の振興対策案づくりに貢献
された方で、先生の指針は現在各

地の振興に反映されています。

そのかたわら、東和町にたびた
び立ち寄られ、東和町誌の編纂や
民具収集のご指導、また、郷土大
学設立など昭和五十六年一月他界
されるまで、私たちに数々の貴重
な教えを授けてくださいました。

その教えの基本は、『郷土に愛
着を持って自らの生に誇りを持
ち、そのことがより良い明日の東
和町を育むのです。現在に生きる
我々が、次代を担う人たちのため
に、より豊かで、より明るい東和
町の町づくり実現の使命を担っ
ていこう。』というものです。

本事業は、その基本理念を踏ま
えながら具体的な目標を定め、そ
れを一步步着実に実現していく
ために、相談機関として著名な学
者や知識人また実践者の先生方か
らなる専門部会を設立して専門部
会を開催するほか、専門部会での
ご助言を生かすために町、議会、
経済団体、各団体の代表者からな
る推進部会を開催しています。

この推進部会では今後の事業計
画を協議し、講演会・シンポジウ
ムの開催、文化的遺産の保存・発
掘のための記念碑の建立、宮本常
一先生の著書の収集・保存、会報
の発行などの事業を推進していま
す。

「過疎を逆手にとる。」

指田志恵子氏来町

五年の初め、過疎地域の現状
や対策などを著した「過疎を逆
手にとる」の著者指田志恵子先
生と記念事業専門部長で郷土大
学の学長でもある米安晟先生が
来町し、総合センターで産業と
福祉についての討論会が開かれ
ました。指田志恵子先生は、

まず、本町の一人暮らし世帯
が三千所帯のうち七百世帯もあ
ることにまず驚いたこと。わ
ずかな滞在期間ながら豊かで温
かい人情味のあるこの町は、他
の町に比べて住民の意見が出や
すい環境のような気がする。高
齢化の進む中、これからの社会福
祉や社会サービスの重要性を考
えながら、人間の喜怒哀楽、真
の生き方などを見極め、精一杯
いきていきたいこと。など感想
や意見、経験を交えながら討論
してくださいました。

米安晟先生は、青年海外協力
隊とともに海外の農業に専念し
たい豊富なご助言くださいいま
した。

宮本先生を

偲ぶ

東和町出身の民俗学者故宮本常一先生を偲ぶ「水仙忌」が、一月三十日、先生の墓所の西方神宮寺で開かれ、郷土大学の聴講生や宮本常一記念事業の委員さんら三十数名が出席され、和やかに行われました。

この水仙忌は、宮本常一先生が



和やかに行われた第3回水仙忌

創設された郷土大学が主催となつて、毎年一月三十日、先生のご命日に開かれていたもので、今年で三回目となりました。

その目的は、今は亡き宮本常一先生のすばらしいお人柄を偲ぶだけでなく、先生がいつも語っておられた「地域が良くなるかどうか

は、その地域に住む人の考え次第です。自分たちの生や地域に誇りを持って地域を盛り上げていくことが明日の東和町の発展につながるのです。」という基本理念を改めて再認識するとともに、それを広く広めて町の発展の運動につなげていくというものです。

『《土》がええ』

長崎 宮本紀子

義父が郷土大学の講義のために、大島に度々帰っていた頃のこと。仲間内で話が出ていたのだったか、私が一人で考えていたのだったか忘れたけれど、郷土大学のバツジを作ったたらというような話をしたことがある。

私の出身校のバツジが《美》という漢字一文字だったのをとても気に入っていたので、同じように郷土の頭の一文字《郷》という字はどうだろうかと言ってみたら、「それなら《土》がええじゃろつ」という答えが返ってきた。

郷土という言葉に、ふるさとという漠然としたイメージしか持たなかった私は、二つの文字それぞれに意味があることに気付かなか

った。けれどもなぜ《土》なのかということとその時義父に聞かなかった。

郷土が、ふるさと（もと住みし里）、生まれ故郷という意味とすれば、私にとって大島は郷土ではない。義父は、心はいつもふるさとにあつたけれど、ふるさとを出てゆき、そしてその子がふるさとに戻ってきた。

また、私の父もふるさとを出て町の暮しを求め、その子である私は伴侶のふるさとである大島へやって来た。そして、この大島で日々暮しを立て、生きている。「遠きにありて想う」大島でもなく、「身を立て、名を上げ」て後、帰る大島でもない、日々刻々と変化していく現在の大島の中で生きている。ここで暮しを立て、子供を育て、やがて年老いていくはずだ。単に生まれ故郷としてでなく、

出席者は、先生の墓前に水仙を手向け、ありし日の先生を偲んでいました。なお、この日手向けた水仙は、数年前から高齢化にさきがけ軽量・省力化作物の生産に取組んでいる地家室の地域おこしグループが、丹精込めて作ったものを譲りいただいたものです。



良い言葉がないのだが、都市や町に対しての棲みかである地方、または田舎に魅かれるものは何なのだろう。大島で生きていくこととしてどういうことなのだろう。以来ずつつと忘れられない、義父の「『《土》がええ...』という言葉には、そのヒントが隠されているような気がしてならない。じつくりと《土》を相手に考えている。

宮本先生のもとへ 旅立った 大見重雄先生

新 山 玄 雄



故 大見重雄先生

出合い。その時の出合いが人生を根底から変えることがある。人が人と出合うことの不思議をこの二人にも見ることが出来る。

その二人、大見重雄先生と宮本常一先生が出合ったのは、昭和三十一年の秋、大見先生が東京農大三年生の時恩師高松圭吉先生の指導で神奈川県荻野村へ林業経営実態調査に参加した時のことである。それが機縁となって大見先生

は、昭和三十三年春、全国離島振興協議会に男子職員の第一号採用者として宮本常一先生の推薦で就職することになった。その後二人は離島振興という共通のテーマで師弟の道を歩むことになる。

宮本常一という先生をどう表現したらいいのだろう。偉大な民俗学者、離島研究の第一人者、教育者、思想家、経世済民の学者、歌人等々。十人十色、その評価はその人の器量によって様々である。

ただ、共通するのは先生に接した人は、多くが先生から発せられる不思議なパワーを感じるということだ。電撃のように閃く人格に打たれ、先生に教えられた風景の中に生きる。そんな人を私は数多く知っている。先生に見出され、魂を吹き込まれた人は多い。先生に出合い、その人生の新たな一歩を踏み出した人はどれほどいるのだろうか。

かつて永六輔さんが、宮本常一先生のお墓参りに来町されたとき永さんに尋ねたことがある。そのころ永さんは地方の応援団長として全国各地を歩きまわりほとんど毎日が旅ぐらしの様子だった。

「永さんは、どうしてこんなふうに全国各地をまわるようになったのですか」そうすると永さんは

私に「宮本常一出合ってしまったからね。あの人が合うところいうことになるのです。あの人はすごい人です。」と答えたのだった。あの永六輔さんにこのように言わしめる宮本先生に改めて感じ入ったことを思い出す。

大見先生も宮本先生に出合ってしまった人なのだ。そして宮本先生の大きなテーマの一つであった離島振興の世界に足を踏み出していかれたのだ。もちろん離島振興はその後、大見先生の人生のテーマとなり生き甲斐となったことだろう。宮本先生は離島振興の慈父と仰がれた正に離島の輝ける星であった。「離島にとつて宮本常一先生は民俗学者ではなかった。それは、離島振興運動の思想的基盤そのものであった。」とまでいわれた先生である。

一方、大見先生は離島振興行政の渦中に身をおかれた。宮本先生の離島にける夢や期待・離島振興の思想を、誠実に実践して現実のものにしよとしたに違いはない。私はその間の事情については詳しくは知らない。ただ現実の行政機構の中での離島振興事業には、様々な矛盾や葛藤があったことだろう。そのことを大見先生から聞いてみたかったと今思う。

宮本先生没後、本町で宮本常一記念事業が始まった。宮本先生の精神をついで町づくりを推し進めようというこの事業の専門部会の委員に大見先生にもなっていた。彼はこの事業に大きな期待を寄せ、私と合うといつも記念事業のことを語ってくれた。

もっとも専門部会の開催がとどこおりがちになると、「あれ、最近音さが無いから記念事業はもうやめたのかと思ったよ」という皮肉を何度も聞いたことがある。それもこれも宮本常一という名にこだわりその精神を継承しようとするからだ。「魂の抜けた記念事業ならやめたほうがいい。それは記念事業に係わる人が固く肝に銘ずべきことだ」ということをいつも私に言われたのだと思う。

その大見先生がお亡くなりになった。早々と宮本先生のもとへ行かれたのだ。今では宮本先生と積もる話でもしているのだろうか。「宮本常一」と出合った多くの人たちは、かの世界で先生に合った時何と報告するのだろうか。そして、私は何と報告したらよいのだろうか。大見先生のことを思うにつけまた考えてしまう。

いい報告が出来るような生き方をしたいものだ。

郷土の歴史とは何か

大島の三郷

第三回では、大島郡の「恵」の歴史についての講義です。

大島郡が歴史上に初めてみえてくるのは古事記の中で、周防国とは別の国であった。小さな所にとつて国が形成されたのかというと、周防国には中国系が、大島には出雲系が多かったので小さいながらも一國が形成されていた。やがて、周防国に合併されるが、それでも小さな郡であった。郡には大郡・中郡・三郷以下の小郡とがあり、小郡の大島には屋代・務理（むり）美敷（みしき）の三つの郷があった。

考古学上、私の親友の一人であった坪井清足という人が、主任として奈良の平城京を発掘した時に一万枚の木簡が出てきた。そのうち三枚の木簡に、大島郡のことがでていた。それで大事な事がわかった。

それは「調」である。租は米で、

庸は政府への労役、調はその地方の特産物のことで、大島郡からは調として「塩」を奉っていた、どのような人が奉ったかと言いますと、海人（あま）であった。しかし、大島郡には海人だけでなく、百姓をしている者もいた。

八世紀、大島の人口？

はたして、当時の家数はどれくらいだったのでしょうか。

郷が成り立つには家が五十戸、大島には三つの郷があるから全体で百五十戸ぐらいで、一戸には五人〜二十人ぐらいが住んでいた。そうすると千二百年前、大島郡には三千人位の人がいまして、その中の千人が東和町の地域に住んでいたと思われる、漁師も百姓もいたが、漁師の方が多かったのではないだろうか。

それでは、大島郡にどれだけの田があったのか、奈良の正倉院にある天平九年（七三七年）の周防正税帳によると、大島には三六三町ぐらゐの田があったことがわか

る。昭和二十年、田の面積は二百町歩で、その当時の水田面積は昭和二十年の十八％ぐらいで開田率は低かった。

船と港

昔、船の着く所は必ず遠浅になつていた。なぜかと言いますと、昔は波止場がなかったため船を着けるのに遠浅が一番便利であったからである。潮が一番満ちきつた所へ船を泊め、潮が引くと船はそこにすわる。海が少々時化ても潮が満ちてくるまで大丈夫である。そのため昔の日本の船を見ると底が平である。

日本の船は江戸時代にたくさん遭難している。これは船の底が平なことが原因している。なぜかといいますが、底が平だと水の抵抗が少なく、舵を大きくしないと向きを変えることができない。そして船が大きいためによく折れ、遭難の原因となつた。

千石船の舵は六畳ほどもあつたので、港に近いづいたら舵をあげた。そうすると舵が効かないので沢山の押船、漕船が港の中へ引きこんでくれた。港がどうして繁盛したかといいますが、そのような漕船が沢山いたからです。

地家室でも、そういう船が三十

隻ぐらゐいた。そうすると漕船に携わる人達がそれで飯を食べてゆける。港が栄えるというのは、このような押船や漕船とそれに携わる人が一方にいたからで、ただ船が港に入ったからにぎわつたのではない。

時化の時、舵をあげて船が港に入る場合、押船や漕船がきてくれないと船は遭難する。昔、日本の船の遭難は、入港寸前の時が一番多かつた。最近できた「日本音吉漂流記」という本を読むとよくわかる。

塩浜と田んぼ

東和町には、浜という地名があります。浜は潮浜であつた所です。塩を焼かない所は灘といつた。この辺で塩を焼いている所はいくつもあつた。下田・長崎・森・内入・和田・油宇・小泊・伊保田・和佐にある。浜があるところはちやんと地割がしてある。

中世以来は浜に塩水をまいて塩を作っていたが、それ以前は藻を取つて塩を焼いていたと考えられます。

四百年以前の塩浜はほとんど揚浜である。それは平安時代からずっと続いていた。それが良くなるのは、油宇、伊保田で狭い所に



民家が密集した集落

沢山の家があります。昔あの狭い所にあれだけの家が生活できた、そのもとなつたものは何だったのでしょうか。それは海産物、特に塩ではなかつたか。

色々突き詰めていきますと、東和町は海人系統の人達が沢山住んでいたということになります。そのことは、元慶二年(八七八年)にできた『三代実録』でわかります。

それによると、昔は神様に位をつけていて、海岸の近くにあるお宮は位が高かった。なぜ、海岸の近くにあるお宮の位をあげたのかといいますが、そのころすでに海賊がいて、武力でも征服しますが

当時は祈祷でも征服している。祈祷で征服するには神様の資格が高い方が効き目あったからで、おそらく大島郡にも海賊がいたと思われる。

律令国家のもとでは水田は全部政府のもので、男なら二反、女ならその三分の二を配っていた。六年経つと調べてまた与えなかつた。それを「班田収授法」という。

千三百年ぐらい前の日本には六十万haの水田があり、千年前には百万haになる。現在は二百五十万haですから、千年前には今の四割の水田が拓けていたのです。

しかし、人口が増えていくのでそれだけでは足らなくなる。新しく土地を拓けばよいといつても政府の命令で拓くのは嫌いである。そこで土地を拓いたら三世代の間は所有を認めるといふ「三世一身法」が天平時代につくられ、土地が拓かれるようになる。

平安時代になると安倍成清がたくさん土地を拓いた。その土地を自分が持っているのだれかに横領されるかもしれないのでその土地を藤原氏へ寄付する。このようにして個人の領地になつた土地を荘園といふ。

瀬戸内の貴重品は？

島末荘は、平家から頼朝のものになり、地主職として大江氏に受け継がれていく。

このようにして律令政治から展開して荘園が成立し、後に大江広元が受け継いだことがわかりただけだと思つたが、どうして、最勝光院や三条局がこの荘園を欲しがつたのかといふと、それは「塩」であつたと考えてよい。

瀬戸内海には、塩の荘園がいくつもあつた。それらはたいいてい東大寺や東寺、又は奈良の興福寺の荘園であつた。寺は塩を一般の人に売つて儲けた。当時の商品として塩ほど価値の高いものはなく、塩を握ることが、その寺を繁栄させた。このようにして千年前からずつと後まで、塩を生産する荘園として多くの人達の注目を浴びた。東和町は、千年以前から白木森、和田、油田村とかに別れているのではなく、島末荘として一つであつた。それが長く続いていた。そういうことが過去でなく現在である。皆現在に反映している。こうゆうように歴史を理解していくことで、この町がいかにあるべきであるか、何がかわらないか、何がこの土地の芯になつているかが理解できたと思ふ。

編集後記

今、世間やマスコミで身近な話題として取り沙汰されているのが「米」不足の問題です。宮本常一先生の郷土大学での講義録にもあるように、二千数百年前「米」が日本に渡来して以来、我々は米によって生活の糧を与えられ、江戸時代には米が貨幣の役割を果たすほど我々の中に浸透していたのです。

その間、私たちにとつても米にとつても幾多の喜怒哀楽があつたと思ひます。

特に、歴史に残る数々の飢饉の時には、人々の生きることへの壮絶な争いや餓死、葛藤があつたにちがひありません。

今回の米不足、たいへんな問題には違ひありませんが、「まずい」と言いながらも海外から米を輸入して日々食べることはできます。

今の世の中、それぞれに色々な問題が有りながらも幸せなのではないでしょうか。

それは、やはり先人たちが苦勞してきた「生きざま」が成し得た我々への贈り物ではないでしょうか。「感謝します。」